

研究ノート

# 秀吉侵攻前後の豊前地方 城郭体制の様相と再編

中村修身

## I・はじめに

近世の美しく雄壮な御城に比べると中世の城館の調査研究は多くない。それでも多くの研究者の手による次のような成果を紹介できる。昭和四〇年代以降、副島邦弘氏、近澤康治氏の『福岡県中世山城跡』は福岡県下の城郭分布の概要を明らかにした。小柳和宏氏ら大分県下の文化財担当者によりまとめられた『大分県の城館』全四巻、『北部九州中世世城郭情報紙』全二七号、『福岡県の城郭』などは縄張り資料をはじめ多くの貴重な資料が集成され刊行された。そのほかにも県教育委員会や各市町村教育委員会が行った調査の成果報告も貴重な資料である。

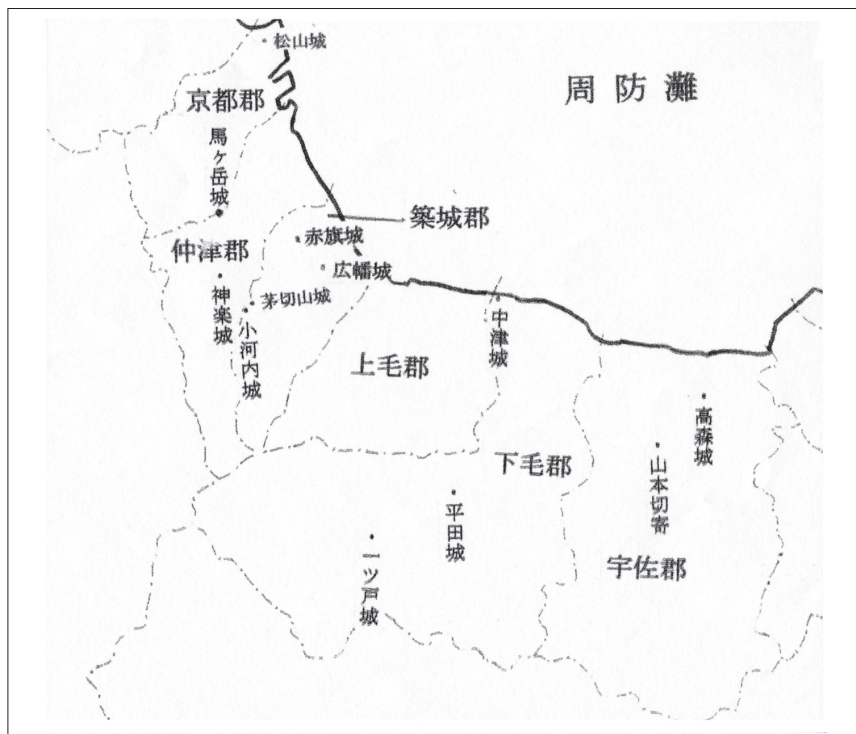
これらの分析からいくつかのことが明らかにされている。

一つに、城郭の規模は領主の実力が反映されているとみられるので、巨大城郭、大規模城郭、中規模城郭、小規模城郭に分けられ、守護・戦国大名や国人領主さらに小領主の区分を反映していること(註1)、さらに、城郭には在地性城郭と非在地性城郭に分かれること(註2)も明らかにされている。領国内の軍事態勢の動向を明らかにするうえで、この二つを念頭に置くことは大切である。

豊前地方(豊前国)は豊臣秀吉政権の九州侵攻に関連した敵・味方の城郭跡が多数遺っており、『黒田家譜』などの活用によって戦国時代末期の様相を城郭から検討するうえで最適な地方である。豊臣秀吉政権の九州侵攻は大友氏支援に名を借りた島津討伐であるが、国人衆にとって

は、領地替えに象徴される領国制から石高制への変更の方が大きな関心事であった。豊前国人一揆後の大名黒田氏の領国内の軍事態勢を明らかにできれば幸いである。

昨年、NHKで大河ドラマ「軍師・官兵衛」放映の影響もあって、九



第1図 関連城郭位置図

州でも豊前地方の戦国史が大変話題になったことは周知のことである。それは歴史研究の分野にも刺激を与え賑わいを見せた。その一つに、豊前地方の城郭の縄張り研究から織豊系城郭を論ずる研究（註3）がある。これは『黒田家譜』などの研究書というか編纂物と大きく異なる結果となっており、今後の北部九州戦国史研究に重大な影響を与えかねないので、点検を兼ねて実態を紹介して置くことにする。

## Ⅱ・豊前地方の城郭

ここでは、豊前地方に所在する多数の城郭の内、天正十五年前後のいくつかの城郭を紹介したい。

### ①馬ヶ岳城（福岡県行橋市馬ヶ岳）（第2図）

行橋市とみやこ町の境（旧京都郡と旧仲津郡境）に聳える馬ヶ岳山頂から北麓に城域が広がる巨大城郭である。南北朝以降に記録に現われる馬ヶ岳城は少弐氏、大内氏、大友氏、秋月氏などが城督を置き豊前国支配の目安としてきた重要な大規模城郭である。長野氏も大友氏の城督であった可能性は極めて高い。長野氏段階までは山頂部に十五の郭、水ヶ手、切岸、六ヶ所の堀切（一ヶ所は四条、一ヶ所は堅堀と組み合わせ、他は一条）からなっている。六ヶ所の堀切は各尾根筋を遮断しており大改修前の城域を知ることができる。これを豊臣秀吉政権の九州侵攻に関連して北麓に長延な横堀と土塁（横矢掛や虎口を設けている）、横堀と併設されている畝状堅堀群（約五〇条の堅堀で構成。至って変則的形態）、堀切四ヶ所、水堀（註4）などで谷地の平坦地を防備する巨大城郭へ大改修したことが判明している。大改修したのは、豊臣秀吉政権下の小早川勢であろう。

馬ヶ岳城がこのような巨大城郭に大改修された理由として、敵地にお

ける兵員などの安全確保、過去に豊前国掌握した覇者たちが馬ヶ岳城の獲得を目したことに倣って制圧後豊臣秀吉の入城を準備したこと、豊前国制圧後の統治の根拠地を目したことなどが考えられる。黒田官兵衛は天正十五（一五六七）年七月三日以降、本城（詰城）としたことから明らかである。

岡寺氏は馬ヶ岳城を「畝状空堀群（筆者註 以下、引用以外は畝状堅堀群と記す）」と、それと連動するように置かれている土塁線は織豊系城郭以前の在地の築城技術による（中略）長野助守の時期の改修である（註5）と述べ、その根拠として「北部九州、特に筑前から豊前地域にかけては有力国人領主の本拠となる居城や敵対勢力との境界領域にあたるいわゆる「境目の城」に過剰なまでの畝状空堀群を構築する城郭を多く見ることができ」（註6）ことを挙げている。氏は「北部九州、特に筑前から豊前地域にかけては有力国人領主」が畝状堅堀群を使用していると主張したのであるが、畝状堅堀群は肥前国、筑前国、筑後国、豊前国、豊後国、長門国、周防国、安藝国のみならず全国で城郭の防御施設として使用されており、長野氏の勢力範囲をはるかに超えている畝状堅堀群をもって長野氏による大改修とは特定できない。さらに氏は「豊前地域における黒田官兵衛・長政の城」の神楽城（みやこ町木井馬場）の項では「横矢掛かりの屈曲した平面プランは（中略）織豊系城郭の築城技術、すなわち官兵衛・長政による改修である」（註7）と説いている。一方で、天正十四（一五八六）年頃に大改修された馬ヶ岳城の畝状堅堀群と連動した長延な土塁などにも横矢掛が設けられている（註8）にも関わらず長野氏の改修と説いており、説明に一貫性を欠いている。

北部九州に分布している城郭の縄張りを調査してきた結果、城郭の規模は領主の実力が反映されているとみなされる。大改修後の馬ヶ岳城や



第 2 図 馬ヶ岳城跡 (図は未完成)

筑前立花城、筑前三日月山城塞群のような巨大城郭は教国を支配する戦国大名が、大規模城郭は国人領主級の領主が築城や維持に関わっていること（註9）を踏まえると、京都郡と仲津郡を基盤とした国人領主長野氏は改修前の馬ヶ岳城（大規模城郭）を詰城としていたことは間違いない。長野氏（国人衆）では馬ヶ岳山頂から北麓を含めた巨大城郭は造りえないし、造る理由を見つけ出せない。このように述べただけでは、納得していただけない方もおられると思うので、文書資料をもとに、長野氏が企救郡を追われ大友氏の庇護のもと京都郡と仲津郡に基盤を移した後、天正六（一五七八）年十一月十二日に耳川の合戦で島津勢に大友勢が敗れた後の長野氏の動向を紹介することによって、馬ヶ岳城の巨大な城郭へと大改修された背景を理解いただけるものと思う。

京都郡と仲津郡の中世文書を集成した『行橋市資料編中世』（註10）や豊前長野氏の文書を集成した『豊前長野氏史話』（註11）をめくると天正七年以後は毛利氏との関係を示す文書が多くなる。今回はその中から三例を紹介することとした。

長野助守から毛利氏（直接窓口は小早川隆景か）へ宛てた天正七（一五七九）年と思われる九月二十八日付け長野助守覚書（註12）は、長野氏が大夫氏から与えられた京都郡、仲津郡の取り扱いと長野一族の人間質を門司城に送ることの免除などについて記したものである。大夫氏が急速に力を失った天正七年に改めて毛利氏と好を通ずべく努力がうかがえる。この後、長野氏は毛利氏に属した。

天正十（一五八二）年と思われる四月十六日に、宗像氏貞が小早川隆景に北部九州の情勢を伝えた「宗像氏貞書状写」が無尽書（註13）に収録されている。そのうち毛利氏と長野氏と秋月氏の力関係と動向が解る部分を紹介しておこう。

長野氏と高春（香春岳城）の高橋元種は不和であることを記し、そんななか秋月種実と長野との縁色（養子縁組のことか）が相違したので、三月下旬に秋月と高橋は相談し馬ヶ岳城（長野氏の本城）を攻めたが、それに対して高鳥広城（直方市）落城後長野領にいた毛利鎮真も共に戦い、築城郡の城井鎮房、田川郡坂本の坂本永泉などが支援したので馬ヶ岳城（長野氏）は勝利したことを伝えるとともに毛利氏の味方同士が合戦し共食いをしていては毛利氏の役に立てないと嘆いている。

天正十四年九月七日付け、以前から好を通じていた毛利輝元から長野三郎左衛門尉にあてられた起請文（註14）におおむね次のようなことを伝えている。

毛利氏から、豊臣秀吉の御下知により豊前に進発することを伝えるとともに、長野氏が馳走（従軍）することに感謝するとともにその後を保障した書状である。

以上の三通から、長野氏は毛利・小早川隆景を通して豊臣政権と好を通じていることがわかる。「長野氏は薩摩島津氏や筑前秋月氏と連繋し、大友勢力や豊臣勢力に反抗した勢力で、天正十四年～十五年にかけて秀吉の九州征伐に備えた」（註15）と言う事実誤認を論拠に長野氏による大改修とする説は成り立たないことを、指摘して置く。

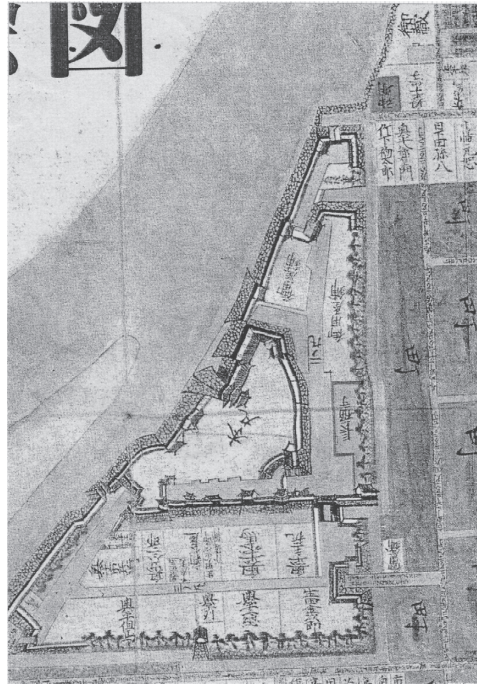
なお、『黒田家譜』によると、黒田氏は本城を馬ヶ岳城から中津城に移した後も慶長五（一六〇〇）年まで支城として、維持管理している。

#### ②中津城（大分県中津市）（第3図）

黒田官兵衛は豊臣秀吉より拝領した豊前国六郡内に古くから使用されていた馬ヶ岳城を居城としたが、わずか半年後に中津城に移る。そこには戦争施設から領内政治と経済さらには文化の要としての施設への転換が意図されたのではなからうか。

現在の中津城は、後世に多くの修改築が行われたことは推測に難くない。天正十六年段階の復元にあたって、堀で囲まれた郭(本丸、二ノ丸、三ノ丸)その外側に武士、工人、商人などが居住する郭を土塁(御かこい山)・堀とで取り囲んでいる「中津城下町絵図」(註16)は大変参考となる。この絵図で注目したいことは巨大城郭であることと二ノ丸に記されている御用屋鋪である。御用屋鋪は藩の政治経済をつかさどる行政施設とすれば、中世の城郭にはみかけない施設である。

ここで、豊前國小倉城(北九九州市小倉北区)の厩について紹介しておこう。厩とは現代流に言う運輪局のようなもので、厩の所在は慶長十四(一六〇九)年と思われる絵図(註17)や寛永四(一六二七)年幕



第3図 中津城下町絵図の一部(中津市観協会・中津藩政中料刊行会発行。)なお、当絵図は吉本弘氏所蔵絵図を複製。関連城郭位置図

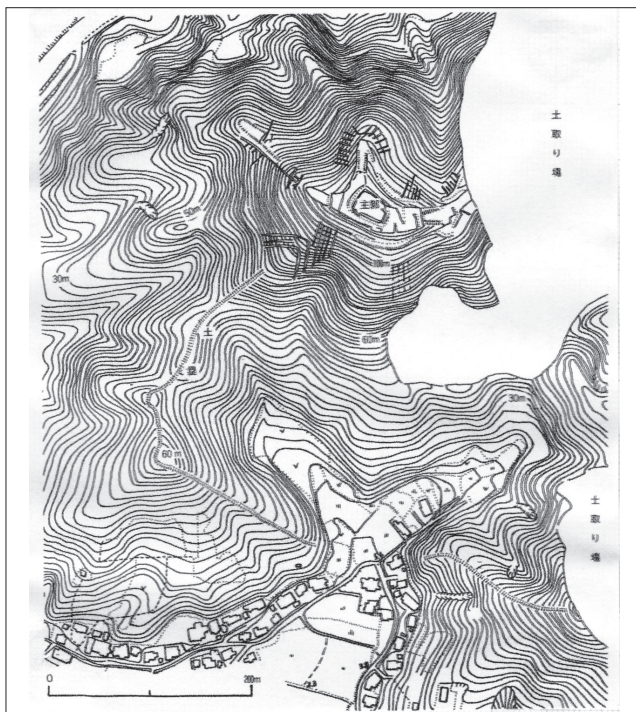
府探索方が書いた絵図(註18)をはじめ藩の各種書類からその存在が知られている。厩跡を発掘調査した結果(註19)、厩の区割りの原型は森吉成による天正十五年ないし十六年の小倉城改修から始まることが確認できた。中津城御用屋鋪は公的施設を意味しており、黒田官兵衛時代からの行政施設であった可能性は極めて高い。

③松山城(福岡県荊田町)(第4図)

荊田町松山城、当時三方を周防灘に囲まれた岬の独立丘陵、標高二二八メートルの松山に位置する。少なくとも三ヶ所の郭群と山麓と谷を取り囲む長延な土塁から形成していたと思われる松山城は土取りによって消滅した部分もあるが、山頂部分に遺っている施設は主要部分である。九以上の郭(土塁で防備された郭と土塁がない郭とがある)、横堀三本、堀切三ヶ所、五ヶ所に畝状堅堀群(うち一ヶ所は半分埋まっている)がある。石垣も随所に設けている。石階段を設けた虎口を設けている。建物の跡も確認でき、そこに慶長前半期の瓦が集中的に散布している(註20)。

松山城は永禄年間毛利勢の大友勢に対する巨大な向城として使用されている。永禄期の山頂部の様子は慶長期の改修によって破壊され把握できないが、麓に廻らされた長延な土塁は永禄期の遺構と思われる。

続く天正十年代の縄張り把握できないが、天正九年十一月三十日付で毛利輝元より吉見政頼、吉見広頼へ宛てた「毛利輝元書状写」の一節「然処長野事松山取付之由候、非無不審候 高橋と内々宿意共候哉」(註21)から毛利勢の向城であることは、明らかである。永禄十二年以後大友氏の支援のもと京都郡と仲津郡に活動の基盤を移した長野氏の動向は馬ヶ岳城の項で述べた通りで、松山城もまた長野氏による増改築はあり得ない。天正十五年以降慶長五年まで黒田氏は支城として使用していた



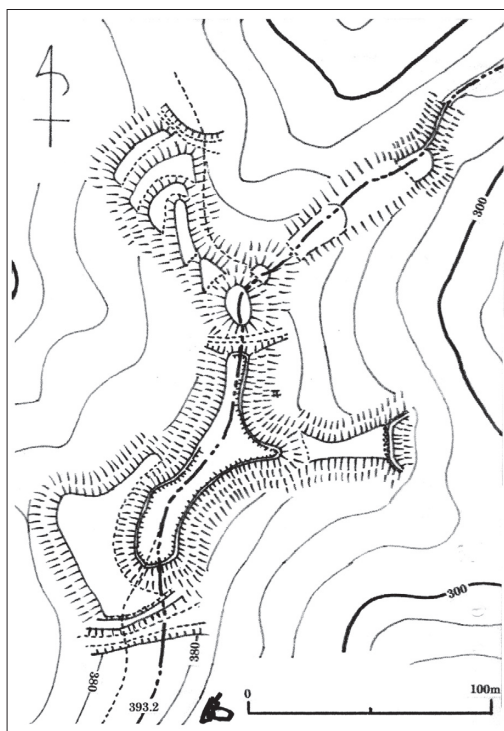
第4図 松山城（山頂部は慶長7年に改修。中村修身作成）

（註22）。その後、畝状堅堀群の一部を含めた山頂部の遺構は慶長七年の細川忠興によって改修（註23）された跡である。

④小河内城（築上郡築上町本庄）（第5図）

本庄城ともいう。小河内城はみやこ町と築上町境（旧仲津郡と旧築城郡境）を南北に走る尾根筋にある。北側九〇〇メートル弱に黒田の向城・茅切山城がある。

約十の郭を三ヶ所の堀切、土橋と切岸で防備している。土塁や石塁設けた郭もある。南側堀切は堀と言っても差し支えないような堀切で幅約七メートル、深さ二メートル弱の箱堀で城内側に土塁を併設している。



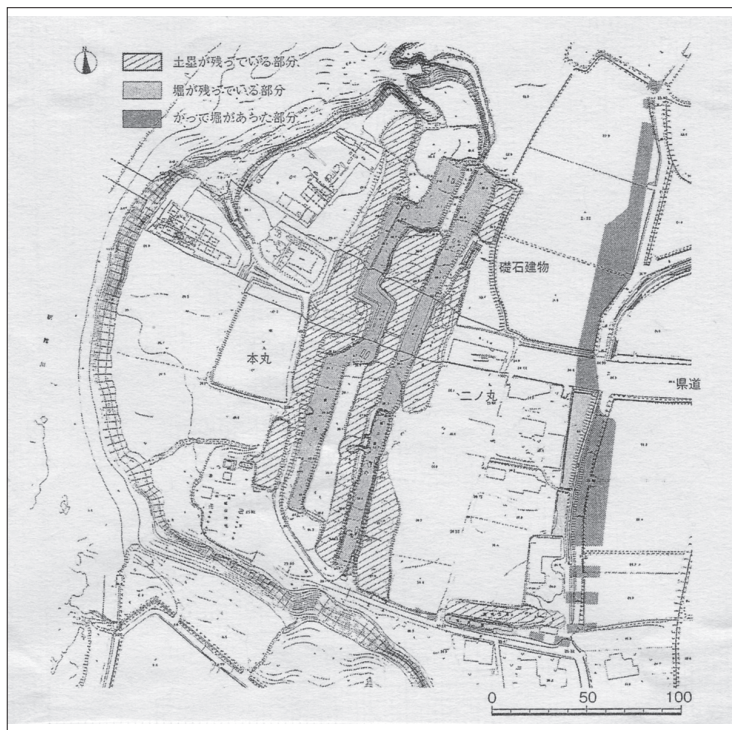
第5図 小河内城（中村修身作成）

なお、この堀切には後世の山道にともなう土橋が造られている。水ケ手を持つている。北側からの入城に使われた土橋は十数メートルにわたって両側が絶壁で幅一メートルの通路となっている。さらに、この部分は横矢掛となっている。随所に天正中ごろの特徴を持っている。

小河内城の初原は今後の課題である。ここでは天正十五年前後のことを述べるにとどめたい。『黒田家譜』（註24）は神楽城（筆者註 茅切峠横に在る茅切山城のこと）から小河内城の位置を「是より城井が要害までは其間七八町ほどあるべし」と記している。この「城井が要害」こそが、小河内城である。

⑤高森城（宇佐市高森）（第6図）

高森城は駅館川右岸に接した丘陵に造られている。本ノ丸、二ノ丸、三ノ丸の郭から構成されている。各郭間は土塁、堀で区画されている。



第6図 高森城(『大分の中世城館第四集』より)

また、城内の西側は駅館川が堀の役割を果たし、東(台地)側は土塁、堀で防備している。二ノ丸、三ノ丸は非常に広い。天正十五年前後、郭が広くなる、堀は幅約十メートル、深さ約二メートルで、土塁も幅約十メートル高さおおよそ二メートルと大きくなる。高森城(大規模城郭)の直線の企画は山本切寄(小規模城郭)や広幡城、赤旗城、光岡城などとともに豊前地方の特色である。高石垣は使用していないようである。門跡と思しき施設(南北十四間、東西五間。一間は六尺五寸の京間を使用)

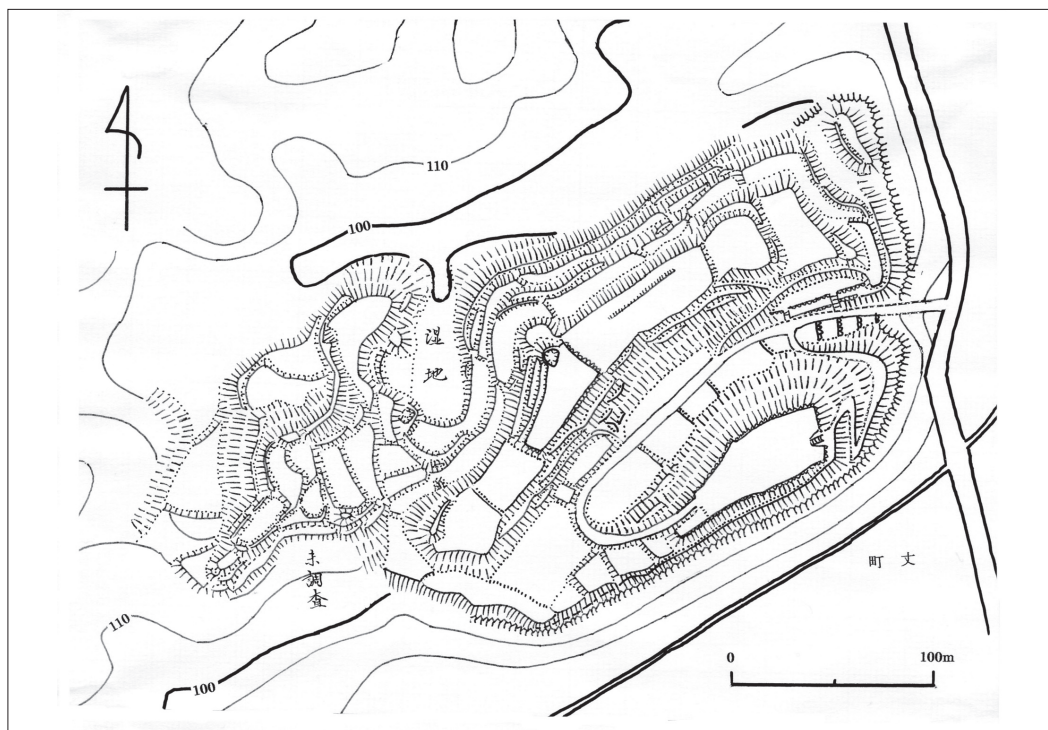
には、鯨瓦や三巴文軒丸瓦や軒平瓦など本瓦葺きである(註25)。軒平瓦は中心に三葉や花文をあしらひ、左右に唐草を展開した模様のものがあり、肥前名護屋城や豊前小倉城などで同模様の瓦が(註26)出土している。「黒田家譜(註27)」を参考にすると、高森城は天正十五年後半から慶長五年までは黒田官兵衛の支城であり、弟黒田兵庫助利高を城番としていた。改修(現在現地に遺る縄張り)の時期を天正十五年までさかのぼらせることは、瓦の時期を考慮すると躊躇する。

⑥平田城(中津市耶馬溪町大字平田)(第7図)

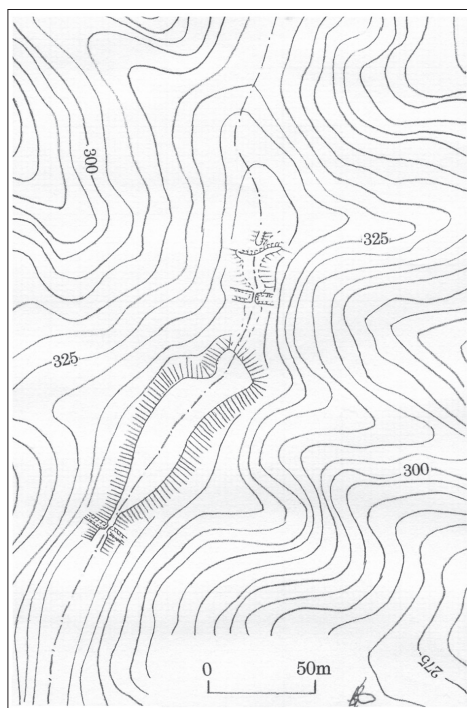
白米城ともいう。平田は本耶馬溪の行政や経済などの中心地として栄えた。大内義隆書の扁額をもつ寺院もある。平田城は山国川の左岸丘陵に造られた大規模城郭である。三ヶ所の高みと小谷に設けた約三十五の郭を切岸・石垣、堀切、土塁で防備している。土塁を敷設した郭もある。城西側の谷を改造し堀切としている。大手虎口は東側谷口でもある城山公園入口と思われる。また、戦闘用虎口数ヶ所も設けられている。天正ごろの城郭に積まれる二段ないしは三段の雛壇状石垣と高石垣の二種類の積み方が見られる。前者は北部九州に広く使用され、後者はこの地方としては新しい積み方である。石垣に横矢掛を設けている。

『豊前故城誌』に平田城の項に「天正十六年黒田勢に攻められ平田掃部助一戦にも及ばず城を渡し叩頭す、其後黒田より家臣備後守利安の嫡男栗山大膳を城番として置かる」と記している(註28)。備後守利安は備後利安であること、平田城の城番は栗山大膳ではなく父栗山備後利安であるなど誤記も見られるが、石垣の特徴が示す時期などと『豊前故城誌』の内容から、黒田氏は改修した平田城を支城とし栗山利安を城番としたと、推察できる。

⑦茅切山城(築上郡築上町本庄)(第8図)



第7図 平田城（村上勝郎、田中賢二、中村測図を一部改変及び復元）



第8図 茅切山城（茅切峠の南側にあり。中村修身作成）

茅切山城はみやこ町と築上町境を南北に走る尾根筋にある。また、茅切山城のすぐ北に古くから仲津郡（西城井谷）と築城郡（東城井谷）をつなぐ茅切峠がある。雑な単郭で南側（小河内城側）は尾根を両側から削り落とした土橋で防御し、北側（茅切峠側）は二条の堀切で防御している。この堀切は一見横堀風で天正十五年前後の特徴を持っている。茅切山城は、黒田勢によって造られた小規模な向城であるけれど織豊系城郭の要素は見られない。豊前国人一揆鎮圧後は放棄された。

当茅切山城を『黒田家譜』（註29）は神楽城と記している。茅切山内の小字通楽を誤って神楽と伝えたことから生じたことであろう。誤記を引き継いで茅切山城をみやこ町木井馬場にある神楽城を当てる、城郭の立地や縄張りで説明すること（註30）は混乱を引き起こす。

『黒田家譜』は「爰に城井谷の口茅切山の内出崎の丸山に、神楽山という古城あり。是を取立て向城として人数を入置、城井が往來の路を指



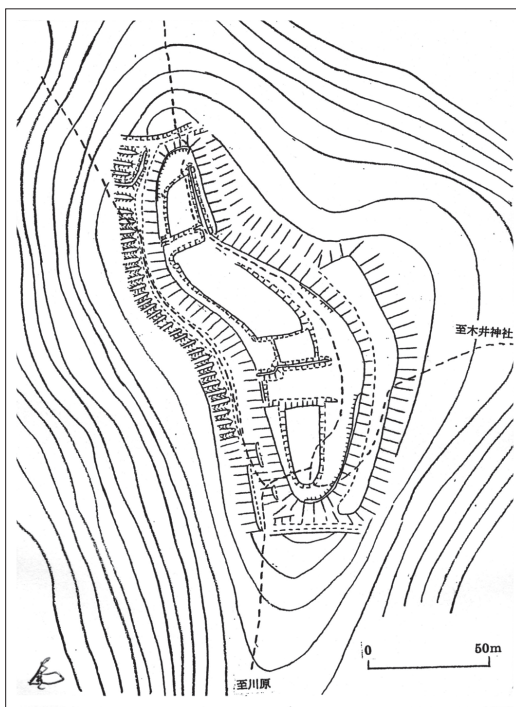
しふさぎ、乱妨をとどめんとて、人夫を多くあつめ、早朝より長政自ら命じて、俄に堀をかけ小屋を作り、即日成就し、(中略) 見方今日の普請につかれたるをかんがへて、敵かならず今夜夜討に寄きたるべし。是より城井が要害までは其間七八町ほどあるし」(註31)と記している。

ここで留意していただきたいことは「是より城井が要害までは其間七八町ほどあるべし」の記載である。「是」を茅切峠(茅切トネル)南横の茅切山城(当城)と取れば尾根筋を南に七八町のところにある「城井氏の要害」は城井氏の小河内城にあたり、文章が示す風景と現地が一致する。他方「是」をみやこ町木井馬場にある神楽城とした場合「城井の要害」に該当する城郭が見当たらない。

貝原益軒は『黒田家譜』編纂の下調べの旅で書き記した『豊国紀行』に「茅切山は城井谷の内本庄村の西なる山なり 山上切たる如くに見ゆる故名付しにや 其少南に茅切嶺<sup>トツテ</sup>有 西城井谷へ越へ行道なり 茅切山は西城井東城井のさかひなり 茅切山より寒田まで廿町ばかりあり 此山 谷の東西の山の内にてはいと高く見ゆ 此山に塞のあとあり 此れは黒田家より兵をこめて 城井が出るをおさえん為なりしと云」(註32)と記している。少なくとも益軒が豊前城井谷を旅した時、城井谷の人々が話していたこと(茅切山と茅切峠の位置関係は読みとりにくい)、みやこ町と築上町境を南北に走る尾根筋にあり黒田氏が城井を攻めるために造った小規模な向城を茅切山城と認識していたの(註33)を『豊国紀行』に書き記したのである。

⑧ 神楽城(みやこ町木井馬場)(第9図)

神楽城は伊良原谷(西城井谷)を北流する祓川の中流にある木井馬場集落の西南標高二七二メートルの神楽山頂にある。木井馬場は城井氏の祖先宇都宮氏の本貫である。



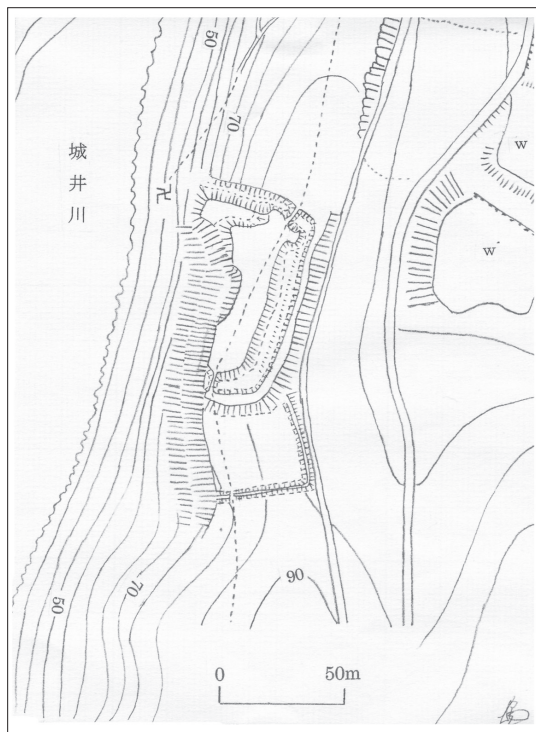
第9図 神楽城(みやこ町木井馬場。中村修身作成)

約十の郭を堀切四条、三十条を超える堅堀からなる畝状堅堀群(普通の形態)で防備されている。土塁で防備された郭もある。郭群を二の堀切で区割している。また、郭の一部に横矢掛を設けている。

岡寺良氏は横矢掛を持つていることを論拠に畝状堅堀群をもち高石垣も互もない神楽城を織豊系城郭と論じる(註33)。同じ論文の中で馬ヶ岳城の位置づけに際し、畝状堅堀群が敷設されていること(註34)を論拠に長野助守段階の改修であり、黒田官兵衛の改修でないと論じていることと説明に整合性が保たれていない。

⑨ 赤旗城(築上郡築上町赤旗)(第10図)

城井川右岸の丘陵に造られた小規模城郭である。縄張り企画は直線的傾向を示す。赤旗城は二郭群からなる。西側は城井川をうまく利用し防備している。北側郭の東、南、北側を防備する横堀は幅約十メートルで



第10図 赤旗城（中村修身作成）

ある。

南側郭は北側郭と雰囲気異なり、築造年代は下るものと思われる。『黒田家譜』は豊前国人一揆のこととして「其後赤旗という所に城井中務（鎮房）より出城をかまへ其家臣壁兵庫、城井宮内といふ兩人をこめ置ける」（註35）と記している。城井鎮房は黒田氏が領主となつてからわずか四ヶ月後の決起であるので、新たに準備するまもなく、豊臣秀吉九州侵攻以前からあつた小領主の小規模城郭を活用したとみるのが自然である。赤旗城を黒田氏が改修したとすれば、豊前国人一揆終結後と云うことになる。しかし、当時の情勢（朝鮮出兵や石高制にともなう領主層の在りからの切り離し政策など）から小規模城郭（砦）を改修してまで維持するとは考え難い。

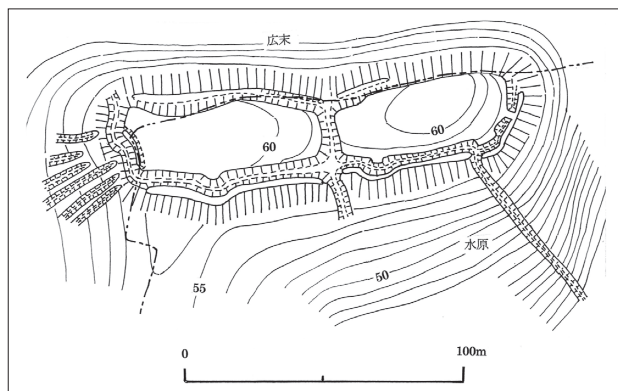
⑩ 広幡城（築上町広幡）（第11図）

広幡城は築上町大字水原・大字広末に所在する。椎田バイパスの建設によって、ほぼ半分が消滅した。近世の字境の土塁や畑地など各時期の遺跡が重複している。二の郭を横堀、畝状堅堀群、堅堀などで防備している。虎口と連動した土橋や郭に飛び出し部（横矢掛とみることもできる）を設けるなどの特長を持つている。

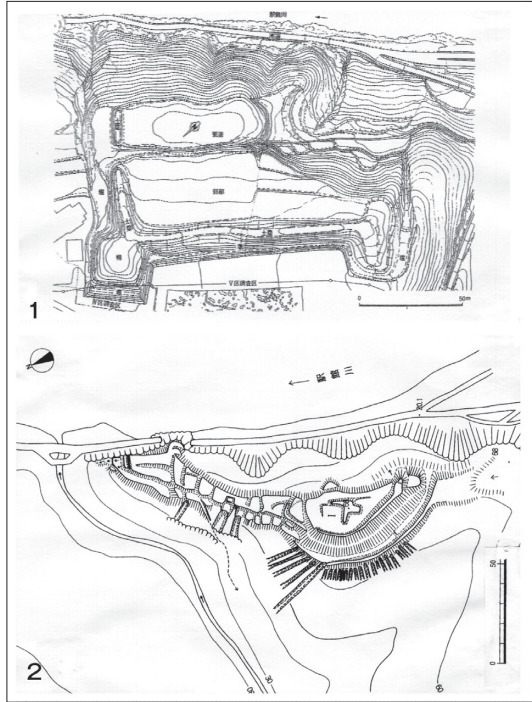
郭をほぼ半周するように設けられた横堀は幅約五メートル、深さ約二メートルと深い。縄張り企画は直線的傾向を示す。畝状堅堀群は一部埋まっていることは留意しておきたい。

文化八年に写された『豊前国古城記』は「広幡城昔宮原中務と云ふ者切り開き、其後城井民部重房出城に取立、瓜田春永と云う者城代此は如水に内通城井の郷案内せしよし」と、城井氏の出城（砦）であることを伝えている。

広幡城を黒田氏が改修したとすれば、豊前国人一揆終結後と云うことになる。しかし、其後の情勢（朝鮮出兵や石高制にともなう領主層の在りからの切り離し政策など）のなか敵の小規模城郭（砦）を改修してまで使うであろうか。今日、現地に見る広幡城は豊臣秀吉九州侵攻に備えて城井氏（国人衆）が改修した縄張



第11図 広幡城（福岡県教育委員会の図を改変。その際字境の土塁、畑地跡などを除いた）



第12図 1. 山本切寄 2. 山本砦(『大分の中世中世城館第四集』より)

り(砦)と考えられる。

①山本切寄(宇佐市山本)(第12図―1)

山本切寄は宇佐市内を流れる駅館川左岸に造られた小規模城郭である。

広い郭二つの北、南、西側は土塁・堀で防備している。土塁は頂部幅約二メートル、高さ約三メートル、堀は幅約七メートル深さ約三メートルである。土塁・堀は直線的規格であることと土塁に櫓台と思しき正方形張出を設けるなど新しい要素を加え丁寧に造っているが、東(駅館川)側は自然地形を利用した雑な造りである。この縄張りには敵の攻撃が予測される台地側に丁寧に防御施設を造ったと言える。一方、当時物資運搬や人の往来に重要な役割を担った駅館川側は雑な造りで、見せること(織豊系城郭の重要な要素)を城造りの一つの目的とする見解は適切ではない。

山本切寄を理解するにあたって次の点は参考になる。駅館川に沿って

南約二〇〇メートルに位置し横堀、敏状堅堀群、土塁、堀切で防備された約二十の郭を持つ山本砦(第12図―2)を攻める向城として山本切寄が造られたと考えられなくもないが、山本切寄の山本砦側は自然地形利用の防備であり権威とか美しさとかは感じ取れない。

「切寄」は宇佐地方で使われた言葉で小規模城郭を意味しており、宇佐地方の在地性を物語っている。つまり、山本切寄は山本砦の建て替え移転と考えることもできるのではなからうか。

Ⅲ・考察

①黒田氏以前の城郭体制

天正十五年以前の豊前国の城郭について概略を見ておくことは、戦国大名黒田氏時代の城郭体制(軍事態勢)を理解するうえで参考となる。豊前国の守護は久しく豊前国内に在住していないことが影響して永続的中心的大規模な館と大規模な詰城が存在しないなかで、豊前国の権益や支配権を模索する少弐氏、大内氏、大友氏などは馬ヶ岳城に城督を置いていることは見過ごしてはならない。

長野氏や山田氏、広津氏、八屋氏、城井氏、中間氏、福島氏、時枝氏など国人領主が大規模な詰城を構え、さらに、小領主も中・小規模ながら詰城を構え領地の維持に努めた。見落としてはならないことは小領主の中・小城郭は国人領主にとって詰城であると同時に上位の領主の支城である(註36)。一方で非在地性勢力・毛利勢は門司城と松山城に陣取り豊前国への進出をうかがっていた。

②黒田氏領内の城郭体制

豊臣秀吉政権下の小早川隆景によって巨大な馬ヶ岳城は誕生した。巨

大城郭に改修した理由として、敵地における指令所（本城）としての機能、敵地における兵員の安全確保、軍事的制圧後の豊臣秀吉の御座座などが考えられたからであろう。豊前国での戦闘勝利後まもなく、豊前国六郡を拝領した大名黒田官兵衛は馬ヶ岳城から巨大な中津城を築城し移転した。背景には領国支配（政治行政機構、常備軍の改変を旨とした家臣団の居住や工人、商人などの居住）が考慮されたものと、思われる。

豊臣秀吉政権は豊前国を軍事的に制圧した後も国人衆に廢城を命じたものの、城郭を破却しないしは撰取しなかった（註37）。このことは豊前国人一揆勢の軍事的基盤を温存させる結果となり、豊臣秀吉政権の限界でもあった。

大名黒田氏は一揆に与した国人衆の城郭（城井氏の大平城、野中左京大夫の長岩城、野中兵庫の雁股ヶ岳城、山田大膳の山田城、野中家来の犬丸城など）を再び攻め落としている（註38）。その後これら城郭を機能させたかどうかは明らかにしない。一方で、高森城、佐田城、一戸城、平田城、松山城、馬ヶ岳城などは大規模な支城として整備し（註39）城番を置いて維持している。留意すべきことは、国人衆の大規模城郭と黒田氏の大規模な支城の間に数的差がみられる点である。一心家臣化されてもなお領国制にこだわった勢力ないしは家臣化されることを好としなかった旧国人衆の存在を暗示しているのではなからうか。

黒田氏の小領主政策と密接な中・小規模城郭をどのように処理したかは、重要な視点であることを指摘して置くとともに現研究段階では、それをつかむ資料は極めてすくないが、つぎのことは指摘して置きたい。黒田勢の手によって造られたと指摘される中・小規模城郭もわずかながら存在することは旧領主層の城郭も維持されていたとみることができ。しかし大きな流れとして、小領主などを家臣化して巨大な城郭（中

津城）に居住させることにより武装解除を進めたことや豊臣秀吉政権は朝鮮出兵を模索しているこの時期、大名黒田氏は領国内の砦いわゆる中・小規模城郭の維持に積極的であったとは考え難く、折をみて廢城にしていったものと推測される。

### ③ 織豊系城郭について

城郭の分析において在地性城郭と非在地性城郭という概念を用いて城郭を見ようとすると、織豊系城郭は両者を識別する基準の一つになると考えられる。しかし、織豊系城郭を主張する論者の織豊系城郭の把握は実態に対応していない部分があり、整理しておく必要を感じる。

織豊系城郭研究で著名な中井均氏は「地域的あるいは戦国大名単位で築城技術に特徴が存在することもおおよそ解明されつつある。とくに織豊系の大名が築城した城郭には斉一性があり、以後の築城に大きな影響をおよぼしたものとして注目」（註40）と指摘。さらに、織豊系城郭の画期を考古学の立場から「石垣・瓦・礎石建物の三つの要素が導入されたものと規定した。（中略）城郭が織豊政権による政策の具現的構築物」（註41）と位置付けている。

織豊系城郭（織豊政権による政策の具現的構築物）は城郭を戦争施設に加えて支配の象徴さらに政治経済的施設へと主要な役割が変化するなか戦国大名の巨大城郭に体现されるものと理解できる。馬ヶ岳城は豊臣秀吉政権によって大改修されたにもかかわらず織豊系城郭の要素がみられない理由は、戦争施設として改修されたからであり、制圧後わずかの期間を経て中津城の建設に着手したのは、戦争施設から行政的経済的施設への転換のなか中津城で織豊政権による政策の具現的構築物（註42）として姿を現したものと受け取られる。現に豊前地方では中津城と小倉城の巨大城郭において織豊系城郭を確認できる。

近年、織豊系城郭の要素に直線的企画や横矢掛などを追加して、中・小規模城郭にも織豊系城郭の存在を主張する向き(註43)がある。それでは説明できない事例が多々あることはすでに指摘して置いた。具体的例を一つ述べて置く。豊前国人一揆城井氏鎮圧のため黒田勢が一夜にして造った茅切山城(向城)は在地性城郭と変わるところがない、つまり、織豊系大名領内の中・小規模城郭であっても織豊系城郭の定をなしていないことを指摘して置く。黒田氏は撰取した中、小規模城郭を造り替えることなく、そのまま使用した場合が多々あったことも考慮しておくべきである。

豊前地方の城郭の中に織豊系城郭の要素の一部を取り入れているとの見解がある。大名支配領内の中・小規模城郭(砦)の維持管理まで豊臣政権が直接命令を出すであろうか。それとも織豊系大名の家臣たちが影響を受け取り入れたと解すのであろうか。前者は考えにくいし、後者の場合はありえないことはないが、あえて織豊系城郭と位置付けると織豊政権による政策の具現的構築物という位置づけが失われてしまう。すぐれた技術、必要な技術は誰もが取り入れるものである。城郭の多様な変化はまず時期差地域差を把握することが肝要である。

本稿を草するにあたって、木村忠夫氏、山崎龍雄氏、藤野正人氏、小川秀樹氏、浦井直幸氏など多くの皆さんからご助言を頂いた。ここに記し感謝の意を表したい。さらに、発表の機会を与えていただいた白峰旬先生をはじめ別府大学史研究会の諸先生に深く御礼申し上げます。

註1 二〇一〇 中村修身「北部九州の戦乱と城郭」『西国の権力と戦乱』清文

堂

註2 二〇〇六 中村修身「在地性城郭と非在地性城郭について」『大分県地方史研究』一九七

註3 二〇一四 岡寺 良「豊前地域における黒田官兵衛・長政の城」『戦国武将と城—小和田哲男先生古希記念論集—』

註4 水堀と判断するに至った理由を挙げて置く。水堀の規模はもとも広い幅で約二〇メートル、平均幅約一五メートル、長さ約一八〇メートル、比高差約三メートルであり、用水池とするには特異である。この水堀は中世末から明治期までの主要道を堤に併用していること、明治十七年十二月測量し陸軍省御用掛片山直道製図の「新町」には当堀は用水池と認識されておらず、忘れられていることを踏まえて馬ヶ岳城にともなう水堀と判断した。

註5 註3に同じ

註6 註3に同じ

註7 註3に同じ

註8 さらに、畝状堅堀群と横矢掛が併設されている例をあげると、永禄十一年に放棄され、その後の使用が確認できない小倉南区長野城がある。

註9 註1に同じ

註10 二〇〇六 行橋市史編纂委員会『行橋市史資料編中世』

註11 二〇一〇 長野悠『豊前長野氏史話』今井書店

註12 二〇〇六 行橋市史編纂委員会『行橋市史資料編中世』二四一頁

註13 二〇〇六 行橋市史編纂委員会『行橋市史資料編中世』二四七頁

註14 二〇〇六 行橋市史編纂委員会『行橋市史資料編中世』二五〇頁

註15 吉本弘氏旧蔵の「中津城下町絵図」を中津市観光協会・中津市藩政史料刊行会が発刊したものを参考とした。原本の図制作年代は天保七年から弘化二  
年頃の間と推定されている。現在、当該図は中津市歴史資料館の所蔵となっ  
ている。

- 註16 山口県文書館毛利文庫蔵『豊前小倉城略図』。描かれている内容は慶長十年頃と考えられる。
- 註17 一九八五「筑前筑後肥前肥後探索書」『小倉藩創始細川家の歴史展』北九州市歴史博物館
- 註18 一九九七（財）北九州市教育文化事業団「小倉城跡2」『北九州市埋蔵文化財調査報告第一九六集』
- 二〇一四 中村修身「豊前・小倉城発掘調査より」『第31回全国城郭研究者セミナー発表要旨』
- 註19 一九八八 苅田町教育委員会「豊前国松山城跡」『苅田町文化財調査報告第八集』
- 註20 二〇〇六 行橋市史編纂委員会「行橋市史史料編中世」一九〇頁から二三五頁
- 註21 二〇〇六 行橋市史編纂委員会『行橋市史資料編中世』二四六頁
- 註22 一九八〇 貝原益軒『黒田家譜』歴史図書社
- 註23 二〇一二 中村修身「豊前・松山城山頂部の評価をめぐって」『北部九州中近世城郭情報紙23号』
- 註24 一九八〇 註22に同じ
- 註25 二〇〇〇 宇佐市教育委員会「高森城跡発掘調査現地説明会資料」二〇一四 九州歴史資料館『黒田官兵衛と城』
- 註26 城郭に関する中世瓦において、同范瓦であると報告されている。そのことは正しいが、同范瓦と記すことよって出土した城郭間の政治的関係を強調しすぎるように思う。城郭に瓦が用いられる時代はすでに商工業が発達していることと瓦当面の模様は范型を用いて作るのが普通であることを考え同模様の瓦と表現した。
- 註27 註22に同じ
- 註28 一九〇三 熊谷克己編『豊前故城誌』
- 註29 註22に同じ
- 註30 註3に同じ
- 註31 註22に同じ
- 註32 一九九四 貝原益軒『豊国紀行』
- 註33 註3に同じ
- 註34 そもそも、畝状堅堀群があれば誰々の城郭、横矢掛があれば誰々の城郭と諸施設の設置を持って属性を決めることは、造った人間が使う人間とは限らないこと。さらに、畝状堅堀群にしる、横矢掛にしる、それぞれの施設分布は濃淡があるものの非常に広い範囲に分布している。その点を踏まえて意義付けを行うべきである。長野氏にこだわりたいのであれば、『行橋市史史料編中世』などを参考に長野氏の活動範囲を押さえ、その範囲での畝状堅堀群の特徴を把握し、他地域の畝状堅堀群との違いを明らかにしてはどうだろうか。
- 註35 註22に同じ
- 註36 多田鴨久（戦国期播磨における本城の成立）『戦国武将と城』二〇一四）は「戦国大名領国下で、本領を安堵された国人領主の拠点をそのまま編成したのが本貫地支城。これに対し、在番支城は大名支配の強化に伴い在番として家臣が派遣されたものとする。そのうえで本貫地支城から在番支城への発展を想定」している。これは守護大名と国人領主の関係を想定している。このことは下位の国人領主と小領主との関係でも言えると考えている。なお、天正十五年以前は守護大名・戦国大名と国人領主の間には本貫地支城とともに仮称・城督支城があることを指摘して置きたい。
- 註37 註22に同じ
- 註38 註22に同じ
- 註39 『黒田家譜』などから、これらは大名黒田氏の支城として使用されたこと

は間違いないが、現地にて築城技術の調査結果をふまえると、織豊系城郭と一括することはできない。一ツ戸城と松山城は、細川忠興によつて慶長七年以降に大改修されているので、天正十五年直後の形状に関しては把握し得ない。高森城と平田城は天正十五年をそんなに下らない時に改修されたと考えられる。両城の築城技術は多くの相違点がみられる。中井氏が「織豊系城郭について」で指摘する要素は揃っていない。さらに『綿考輯録卷十二』によると、佐田城は母里太兵衛の居城である。しかし、この城も一部改修しているであろうか、ほとんどが佐田氏時代の施設を使っている。本城・馬ヶ岳城は岡寺氏も指摘するように織豊系城郭の要素がみられないのに、本城より先に支城（高森城、平田城）を織豊系城郭とすることは理論的に違和感をもつ。

なお、慶長七年以降に改修された一ツ戸城、松山城には瓦葺建物、高石垣がみられることから織豊系城郭とする見解を示す見解がある。しかし、関ヶ原合戦以降徳川幕府が権力を掌握していることを考えると、織豊系城郭とするのは誤解を生じる。

註 40 一九九四 中井均「織豊系城郭の特質について―石垣・瓦・礎石建物―」『織豊城郭創刊号』織豊期城郭研究会

註 41 二〇〇二 中井均「織豊系城郭の地域的伝播と近世城郭の成立」『新視点 中世城郭研究論集』新人物往来社

註 42 城郭は戦闘に備えて築城ないしは改修するのが普通である。しかし、織豊系城郭は戦争勝利後に造ることを指摘したものとして注目しておきたい。

註 43 註 3 に同じ